

六 花

月刊俳句雑誌りつか
chairman yamada rokko
secondary chairman &
the editor in chief kotori
designed by little bird

12月号

2008

輪

山田六甲

あ 有^{あり}明^{あけ}の月に木^こ枯^{がら}止^しみにけり
ら 落^{らく}書^せきの石洗^せひをり年用意
ざ 箆^{ざる}を編^あむ輝^{あか}れてをりにけり
ら 洛^{らく}西^{せい}に大風吹ける竹の春
む 紫の雲のたなびく紅^も葉^み山^やま
こ 甲^{こう}羅^ら干す亀に白鳥近づきぬ
の のこぎりを弓もて弾ける秋^し灯^{ゆう}下^{とう}か
よ 夜の空に鷺の一声冷たかり
の 残り福と言ひて買ひけり皮コート
ほ ほつれたるマフラーを編み直しをり

か 兜かぶと 煮に や 鱒ぶり 大だい 根こん の 針はり 生しょう 姜が
の 呑の み 干か さ ぬ 間ま に 注つ ぎ 足た され 忘わ 年ねん 会かい
お 大だい 声せい に 皆みな が 振ふ り 向む き 年ねん の 市いち
も 纏ちん れ た る 電でん 車しゃ の 繩じゆ を 引ひ く 寒かん 暮ぼ
ひ 引ひ く た び に 枯かれ 蔓つる の 鳴な る 烏からす 瓜うり
で 電でん 報ぱう の あり し 昔むかし よ い て ふ 降ふり る
に 煮に こ ご り に 魚うお の 粗あら 買か ち 日ひ 暮くれ かな
い 息いき 詰つ め て 水みづ 風かぜ 呂りよ に 入い る 冬とう 至じ かな
ま 松まつ ケが 枝え の 蔭かげ を 彩いろ る 茸きのこ かな
ひ 灯ひ を 点と す 大だい 橋きよ に 秋あき 落ら 暉つき かな
と 灯とう 籠ろう の 火ひ 影かげ に た わ わ あ ぶ ち の 実み

ことり

あ あふちの実輝かしくある日なりけり
ら 乱打せる太鼓聴きつつ新酒かな
ざ 粗目糖冬の日差しに琥珀めく
ら 辣蕪のごとく着ぶくれゐたりけり
む 斑雲の奥にオリオン確かなり
こ 講堂に寒さつのれるばかりなり
の 能面と向き合ひ座せる冬座敷
よ よちよちと山茶花によりゆける子よ
の 野晒しの朽木を割りて焚火かな
ほ 箒目に山茶花紛れ込みゐたる

か 柿かきすだれ簾 分けて挨拶かはしをり
の 能のう管かんの音の如くよ寒かん風ふうは
お 置物の猫を炬こ燧たつに入れてやる
も 持ちきれぬ物は捨てゆき忘年会
ひ 日に透くる木この葉は時しぐれ雨を浴びてをり
で 伝言を認したためる手の冷えゆけり
に 二階より降り来し足た袋びの白さかな
い 井戸水を覆おおひ隠せる落葉かな
ま 舞ひ上がる落葉の渦の中にをり
ひ 火の粉飛ぶたびによけつつ焚火かな

花束を胸に無月の坂長し

梶浦玲良子 れいりょうし

すりこ木に夕蝟ひぐらしの遠さかな

星月夜ことばを探す寺勾配

小面おもての泣きたき唇くちや流れ星

ゴム毬まりが近くに弾みはず草紅葉

はなたばをむねにむげつのさかながし

無月がよく利いている。花束には祝事・見舞・不祝儀さまざま用途がある。が、実際に花束を抱いているのでなく胸の中にある花束として鑑賞したい。無月の坂がことさらに長く感じられ、花束は胸の中で一歩ごとに揺れる。届けるあてのない心のゆれか。坂道は普段よりも二倍も三倍もだらだらと長く感じるのだ。また、実際に花束を抱いている光景でもいい。

黒鯛の勇ましく糶り落とされり KOKIA

糶^{せり}人の蛸^{たこ}から蛸を引き剥^はがす

円柱の糶場の油臭^{くさ}かりき

日焼子や梅干ほどの力^{ちか}癩^{らしか}

骨だけの団扇^{うちわ}波間に漂^{ただよ}へる

いさましくくろだいのせりおとされり

「勇ましく」がいかにも黒鯛らしい表現。同じ鯛でありながら真鯛や桜鯛とは全く違う。その違いを事に言い当てた。様々な魚が競られて行く過程で黒鯛が出され糶り場の空気が一変した。糶は佳境に入って活気づく。黒鯛はカイズとかチヌといい、夏に美味で釣魚としても人気がある。ちなみに、大阪湾のことを茅渚（チヌ）の海というのも黒鯛が多いことから。

馬の恋

貝森光洋

天高した鬣たてがみなびかせ馬の恋
 鬣を寝かせて馬の夜長かな
 天馬にはいよいよ遠し馬肥えて
 豊年とよとしや聴きこき耳みみして岬みさき馬うま
 馬小屋のとつぷり暮れてとろろ汁

葛くず畳たたみ

木内美保子

山畑やまがはに覆おほひかぶさる葛畳くずたたみ
 秋風あきかぜに草くさの莢さや鳴なるの夕ゆふべかな
 杖抱つえだいて風かぜの音ね聞きく秋あき遍へん路ろ
 絹寂きぬさびて色いろ失うしななひし捨すて扇あふぎ
 木の枝えだに苦にが瓜うり熟うる庭にわの秋

せつじゅうしゅう
雪樹集

立秋
筒井八重子

金色の一筋秋の日の出かな
目を刺せり日盛りの葉の照り返し
てのひらに滴したたらせ梨剥なしきにけり
立秋や白き矢放ち沈める日
足くびの蚊の名残なごり搔く夜長かな

落蝉
永田 勇

蝉持ちて子の公園を駆け回る
指先に落蝉すがり付き来たる
肩上げて漕こげる自転車天高し
朝顔の雨粒たまごにまろび落つ
朝顔の赤青並び咲きにけり

六花集

六甲選

藤原春子

雨後の枝に蓑虫垂れぬたる
落蟬を力づくにて曳ける蟻
にがうりに覆はれてをり厨窓
大粒の雨に朝顔叩かるる
教材としての朝顔咲かせけり

堤内久美子

赤とんぼ四角き句碑の上を飛ぶ
秋風やさざ波たたみ渡りゆく
百選の棚田を焦す曼珠沙華
休耕田薬広げたる曼珠沙華
台風や外れしまゝの蝶番